

愛知県における女子中等教育に関する歴史的研究
——明治・大正期を中心に——

Historical study of woman's secondary education in Aichi prefecture
——Focusing on the Meiji and Taisho eras——

佐野 はるか (教育学領域)

1 問題意識と研究目的

この半世紀、明治期を始めとする女子教育の普及について歴史的な研究の蓄積がなされてきた。近年では小山静子や深谷昌志らによる研究により、女子教育が普及した理由は良妻賢母を育成するためであったというのが一般的な見解として定着している。明治から大正期においては、小学校を卒業した後、家庭に入る女性が大半であったことから、次世代の子どもを育て家庭を支えるという国家の要求に正面から応えるものであり、良妻賢母教育は女子教育の普及に大きな影響を与えた。

しかし、多様な設置形態によって設立された当該期の女子中等教育機関の教育目的は「良妻賢母」だけに集約されるものであったのだろうか。良妻賢母主義のイデオロギーの有効性について廣田照幸は懐疑的な立場をとり、上からの良妻賢母主義を浸透させていくという視点とは異なる、実態に即して研究することの必要性を指摘した¹⁾。米田俊彦は「地域」という範囲を用いて実態に即した研究の必要性について、各地域社会の実態に即した女子教育が行われていた可能性があり、モノグラフの蓄積が女子教育の実態解明をより豊かにすると指摘した²⁾。このように、イデオロギー分析のレベルでは見えてこない、受け手であった女性や地域社会に目をむけた実態の解明が今後の研究課題として残された。

女子の中等教育、とりわけ高等女学校に関しては近年研究の蓄積が進んでおり、そこで描き出されてきた女子中等教育とは、高等女学校を中心として良妻賢母主義のイデオロギーを浸透させる役割だけでなかったことが判明してきている。水野真知子は「良妻賢母」の分析や「女子像」の類型化などに依らず、「素朴に

年代を追い、高等女学校の歴史を考察し、その改革課題を探³⁾」ることで女子教育の実態を明らかにした。これらの研究によって「良妻賢母主義に集約されがちな高等女学校教育にも多様な局面があったことが具体的に示され⁴⁾」、高等女学校に関する研究が深められてきた。しかし、これは一つの学校種に限定して捉えた場合であり、戦前日本における女子の中等教育全体を捉えたものではない。女子の中等教育機関には高等女学校だけではなく、実業学校（商業学校や農業学校など）や各種学校が存在し、多種多様な女子教育が展開されていた。多様な産業と密接に関わっていた学校種（実業学校や各種学校）に関する代表的な研究として、三好信浩や土方苑子等による研究が挙げられる。全国的な各学校種の設立過程や教育目的が整理され、これまで見落されがちであった学校種の研究が進んだ。また上記に関連して、各種学校や高等女学校卒業後の女子には小学校や中学校教員への進路が拓かれていたことに関しても、近年急速に研究が進展している。本研究が研究対象とする愛知県については井上恵美子による研究⁵⁾があり、これらの研究課題は各学校内部に所蔵されている学則等の史資料の調査が必要であり、十分に研究的な蓄積が進んでこなかった。戦前日本の女子中等教育が果たした役割の全体像を解明するためにも、本研究では特にこの点に留意しながら史料調査を実施した。

以上のように、日本全国を対象としてモノグラフの蓄積が進められているが、未だにその数が少ないことから地域の教育要求によって女子教育が設立されたという仮説を考察するところまでには至っていない。見落とされがちであった学校種を含めてトータルに考察することにより、女子中等教育がどのような役割を果たしていたのかについてより広い視点で捉えることが

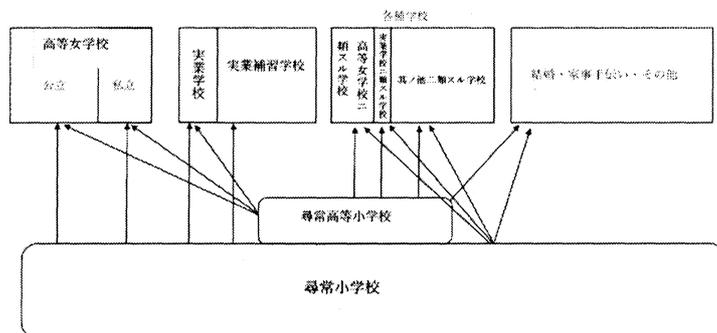


図1 女子の小学校卒業後の進路

【注1】 各校の大きさは概ねその人数比を表している。

【注2】 愛知県『愛知県統計書』1920（大正9）年度及び1921（大正10）年度より作成した。

可能になり、不足している事例研究を蓄積することによって戦前日本における女子中等教育の全体像を解明することに繋がると考える。

そのため、本研究においては戦前日本における女子中等教育史を研究テーマに据え、主に愛知県を事例として考察する。愛知県を選択した理由は、次の三つである。①愛知県には、都市部や農村部など県内に様々な地域が存在したからである。特に明治期から複数の産業が発展した地域があり、それに伴い産業教育も盛んに行われていたと考えられる。②愛知県には、明治期から女子を対象とする多種多様な学校が設置されていたからである。特に他府県とは異なり、私立による女子中等教育学校が複数設置されていたことが特徴の一つとして指摘でき、創設者の教育理念に沿った女子教育が行われていた。③女子教育に関する史資料が豊富に残されているからである。①や②とも関連するが、愛知県は多様な産業を行う多様な地域があり、それに伴いさまざまな女子を対象とする学校が設置され、私立を中心に創設者や学校運営に関する史資料が豊富に所蔵されていることが多い。

本研究では、学校種別に代表的な学校を特定し、学校内部に所蔵されている史資料の調査を実施した。また、必要に応じて国立公文書館に所蔵されている史料を調査し活用した。具体的には、学校沿革誌、同窓会誌や学校一覧などに掲載された寄稿文、『愛知県統計書』に掲載された統計数値、文部省へ申請した許認可書類等である。

2 論文構成

序章 問題意識と論文の構成

- 第1節 問題意識とテーマ設定
- 第2節 先行研究
- 第3節 各章の概要

第1章 高等女学校

- 第1節 全国的な動向
- 第2節 愛知県における変遷
- 第3節 名古屋高等女学校

第2章 実業学校（商業）

- 第1節 全国的な動向
- 第2節 愛知県における商業学校
- 第3節 名古屋女子商業学校

第3章 実業学校（農業）

- 第1節 全国的な動向
- 第2節 愛知県における農業学校
- 第3節 作手農林学校

第4節 各種学校

- 第1節 全国的な動向
- 第2節 愛知県における各種学校
- 第3節 名古屋裁縫女学校

終章 本研究のまとめと今後の課題

- 第1節 本研究のまとめ
- 第2節 今後の課題と展望

3 論文の概要

第1章 高等女学校

第1章では高等女学校の成立過程について取りあげ、特に名古屋高等女学校の事例について考察した。全国的に高等女学校は、裕福な家庭の女子に「良妻賢母」となる教育を行うために設立された。高等女学校は女子教育を代表する学校種として全国に多数設置され、設置主体はさまざまで、教育内容は教養科目に裁縫や家事等の実践的な科目が加えられた。これらを学んだ女子に求められたことは、将来家庭において「良妻賢母」として活躍することだった。また、一部の高等女学校に置かれた師範科や補習科には小学校教員となる道も拓かれており、次世代を担う職業人を輩出していたことから、高等女学校の中には「良妻賢母」としての知識を活かし「職業人」となる女性を見据えた養成が行われていた学校も存在した。

このような全国的な動向と同様に、愛知県においても「良妻賢母」を育成することを主目的に掲げた高等女学校が相次いで創設された。周辺の府県と比べて、愛知県では比較的早い段階から高等女学校が設立された。設置場所については、名古屋市内にやや集中的に私立学校が設置される傾向が確認された。設立された各学校では一般的な高等女学校と変わらないカリキュラムで教育が行われていたが、各学校長等が掲げた教育理念により学科目に多少の増減が確認でき、各学校で特色のある教育が展開されていた。

例えば、名古屋高等女学校の場合、創設者・越原春子は女子教育の振興に力を入れた。春子は、常に時代に沿った知識を修養する努力を惜しまない賢い妻や母でありながらも、優しさを忘れず接することのできる「良妻賢母」を育てる教育を目指し、とくに将来小学校教師として活躍する女性像を求めている。設置された補習科では「尋常小学校本科正教員免許状」「小学校専科正教員免許状（裁縫）」「学校看護婦」という三種類もの資格が取得できる道を確保し、女性の社会進出を促す足掛かりとしての機能を備えていた。

第2章 実業学校（商業）

第2章では実業学校の一つであった商業学校の成立過程について取り上げ、特に名古屋女子商業学校を事

例として考察した。全国的に女子商業学校は「商家の奥さん」の養成にはじまり、商店やデパートの販売員の養成まで幅広い人材養成を担った。明治初期には女子の商業教育の必要性から、商業に関する知識を兼ね備えた「良妻賢母」の養成が掲げられた。この女子商業教育への要求は戦争によってさらに重視されるようになり、男子を上回る数の女子が商業学校で学んだ。教育内容には「商業事項」や「商業簿記」等が配置され、裁縫や家事よりも多く課される場合もあったことから、女子に求められた役割は妻や母としての役割だけに止まらず、商業に関する専門的なものであったといえる。

愛知県の商業は日本の中心という立地を活かして急速に発展し、多くの商業従事者を教育することが不可欠となったため、全国的にも早い段階で商業学校が創設された。男子商業学校では「商業」的知識に止まらず「銀行」「鉄道」など多様な内容が教育され、将来の商業を支える者が養成された。

愛知県における女子商業学校の事例として、名古屋女子商業学校を取り上げた。同校は専門的な商業知識を有し商業に従事する夫と同じ志を持つ、理解のある妻を養成することを教育方針として掲げていた。妻や母として必要な「裁縫」を高等女学校と同等程度に配置しつつ、「簿記」「商品」「経済」「法規」など商業的な教育内容も備えた学校であった。愛知県出身の生徒が多かったことから、卒業後は愛知県内に就職した者が多かったと考えられる。それらの生徒ののちに県外に嫁いでいったことも確認できたため、愛知県に限らず全国に「商家の奥さん」を送り出した学校であったともいえる。

第3章 実業学校（農業）

第3章では実業学校の一つであった農業学校の成立過程について取り上げ、特に作手農林学校の事例について考察した。農村社会に生まれた女子はもともと農業に従事する存在であったが、男子と同等レベルの農業教育は必要とされていなかった。しかし、女子の農業教育は近代化や移民問題等の国家政策の中で発展し普及するようになっていった。女子の農業学校で求められた農業に関する知識は男子と比べると僅かであったが、家庭で裁縫や家事と共に簡易な農作業に従事するためには必要不可欠な教育であった。男女がもともと協働で農業を支えていた農村では、効率的に農業を営む仕組みの中に女性の役割が位置づけられていたのだと考えられる。

愛知県においては、地域社会の教育要求に基づき農村に農業学校が設立された。そのため設立場所は農業が盛んな地域が多く、知多郡から西加茂郡にかけての地域が代表的であった。また、近代化の影響により農村社会が衰退していく中で、農業学校は遊学や離村の

歯止めとしても機能することで次世代の農業従事者を育成した。

愛知県において、最も長期にわたって女子に農業教育を行っていた学校は作手農林学校であった。作手農林学校には女子部が設けられ、卒業後農家に嫁ぎ家庭を担いながら簡易な農作業を行える女性が必要とされた。教育内容には養蚕等の簡易な作業を中心とした農業科目と、裁縫を中心とした家政科目が配置された。また、同校は実習を盛んに取り入れた教育を展開していたことが確認でき、実地における農業学習によって実際に役立つ知識が教授されていた。『愛知県統計書』によると、ほとんどの生徒が卒業後には「実業従事者」として従事しており、「良妻賢母」として家庭を支えながら、農家のあり方に理解を持ち簡易な農作業を担うことができる者として活躍していた。

第4章 各種学校

第4章では各種学校の成立過程について取り上げ、特に名古屋裁縫女学校の事例について考察した。各種学校は法令で規定された正系の学校種ではなく、「その他＝傍系の学校種」として誕生した。法的規制が少なかったことから多様な各種学校が生まれた。女子を対象とした各種学校では「裁縫」や「家政」を扱う学校、あるいは「産婆」や「看護」を扱う専門的な学校が最も多かった。各種学校は、その種類や設置数の多さに加え、のちに高等女学校等へ昇格した教育機関であったことから戦前日本における女子中等教育の中核に位置し、女性に求められた知識や技術をより実践的・専門的に学ぶことができる学校として設立され、その技術は妻や母として、あるいは小学校教師や看護師となることによって活かされた。

愛知県における各種学校は特に尾張地方において発達し、1902（明治35）年頃までは習字・国漢学・数学等を中心に掲げた学校が多かったが、1902（明治35）年以降になると裁縫・簿記・看護等へと移行していった。各種学校の中には師範科や補習科を設置し小学校教師への道を拓いた学校もあり、各学校の特殊性を兼ね備え地域社会に密着する小学校教師を輩出した。

名古屋裁縫女学校を例としてあげると、当該期の女子教育の不足を憂慮し裁縫教育に力を入れた学校として同校は創設され、専門的な知識や技術を持ち家庭で活躍する女子が養成された。その専門性の高さを利用し、本科と師範科の成績優秀な卒業生には無試験検定で「小学校専科正教員免許状（裁縫）」が下附されており、小学校教師の輩出も担っていた。愛知県においても、複数の各種学校において無試験検定により小学校教師となる道が整備されていたことが確認でき、各学校の特殊性を活かして先進的な教育を展開していたといえる。

以上をふまえて、戦前の愛知県における女子中等教育の特徴として次の3点をあげることができる。①愛知県において女子を対象とした学校は地域社会の実情に沿って設置され、学校種によって設置された地域に偏りがあったこと、②当該期の女子教育の役割は必ずしも「良妻賢母」に集約されず、多様であったこと、③は愛知県の女子中等教育機関は豊富に展開され、女子に多くの選択肢が拓かれていたことである。

愛知県において、高等女学校や商業学校は主に尾張地方に多数創設された。名古屋市を中心として発展した尾張地方において、妻や母としての役割も小学校教師としての役割も次世代を育てる役割として女性に求められ、人が集まる尾張地方の更なる発展に貢献した。また、経済が活発であった名古屋周辺地域のデパートや商店でも、これらの学校で知識や技術を身につけた女子が活躍した。もともと農業が盛んな地域であった愛知県では、特に農家の割合が高かった三河地方において将来農家に嫁ぎ、より専門的な知識を持って家庭で活躍する女性が求められ、家庭において男性と同じ価値観をもって農業を支える女性が養成された。女子を対象とした農業学校は、農村の衰退に繋がる遊学を食い止める役割も担っており、地域外へ流出する若者を農村に繋ぎとめる抑止力としても機能した。当該期の愛知県は、近代的な発展を遂げた名古屋市を中心として栄え、県内地域における土地や産業の実情に沿って各学校が設立されていたのである。

次に、②愛知県の女子に求められていた教育は、必ずしも「良妻賢母」に集約されない役割を果たしていたことについてである。地域社会の実情に沿って設立された各学校の教育では、家庭で母や妻として役に立つ裁縫や家事を中心とした「良妻賢母」教育が展開されていたことは否めない。しかし各学校では、女子に適した知識に加え専門的な知識を様々な方法で教育し、地域社会で一労働者としても活躍することができる知識や技術が教授された。これは、当該期の女子中等教育が妻や母として必要な知識を教授するだけでなく、専門的な知識を教育することで、より地域社会のニーズに沿って活躍できる者を育成していたといえる。これらの専門的な知識が、さらに女性に「職業」という道を拓き、「良妻賢母」の育成という枠内には必ずしも収まりきらない、女子の自立に繋がる教育が行われていたことを垣間見ることができた。

最後に、③当該期の愛知県では女子中等教育機関が豊富に設置されていたことについてである。女子を対象とした高等女学校、実業学校（商業・農業）、各種学校のすべてが愛知県内には揃い、またその数も豊富であったことから中等教育を享受する機会が県民に広く拓かれ、愛知県内の女子は必要に応じて選択できる状況にあった。それは、求められた女子としての役割を全うするためであったり、家業を営むためであったり

と時代や地域社会の制約に包括されながらの選択ではあったが、女子は各業界に関わる専門的な知識を習得し社会に出ていくことができたのである。

今後の課題として、次の3点をあげることができる。第1点は、学校生活の様子をうかがい知るために必要な女子農業学校に関する史資料の発掘とそれによる詳細な教育内容等の解明である。第2点は、本研究では史料の制約から限定しなければならなかった愛知県の各種学校の全体像について考察を深めることである。第3点は、地域社会と学校の関係性の解明に必要な不可欠な生徒の就職先（企業）と学校との関係史を考察することである。以上は、本研究に残された課題であり、今後さらに調査を継続していきたい。

注

- 1) 廣田照幸「女性の教養と学歴／学校文化と生徒の意識」天野郁夫編『学歴主義の社会史——丹波篠山にみる近代教育と生活世界——』有信堂、1991年、38頁。
- 2) 米田俊彦「中等教育における性差の構造の形成」寺崎昌男・編集委員会共編『近代日本における知の配分と国民統合』第一法規出版、1993年、223—224頁。
- 3) 水野真知子『高等女学校の研究（上）——女子教育改革史の視座から——』野間教育研究所、2009年、40頁。
- 4) 桑田直子「『女子教育』史研究の課題と展望——近代を中心に——」日本教育史研究会編『日本教育史研究』第18号、1999年、112頁。
- 5) 丸山剛史編『戦前日本の初等教員養成における初等教員検定の果たした役割に関する府県比較研究』平成26年度～平成29年度科学研究費補助金基盤研究（C）、研究成果報告書、2018年所収。

4 主要引用・参考文献

- ・高等女学校研究会『高等女学校の研究——制度的沿革と設立過程——』大空社、1990年。
- ・土方苑子編『各種学校の歴史的研究——明治東京・私立学校の原風景——』東京大学出版会、2008年。
- ・丸山剛史編『戦前日本の初等教員養成における初等教員検定の意義と役割に関する通史的事例研究』平成23年度～平成25年度科学研究費補助金基盤研究（C）、研究成果報告書、2014年。
- ・水野真知子『高等女学校の研究（上）（下）』『野間教育研究所紀要』第48集、財団法人野間研究所、2009年。
- ・三好信浩『日本女子産業教育史の研究』風間書房、2012年。